

父と母の生涯

久保田 周太郎

自治医大前キリスト教会牧師

私が最初にキリスト教にふれたのは、高校生の時、「偉大な生涯の物語」という映画を見た時でした。しかしその少し前に、種子島の私の家で聖書を見たことがあります。

ある時、私は家の本箱に何か見慣れない分厚い本を見つけました。背表紙に「聖書」と書いてありました。それはその頃の種子島の農家では大変珍しいことです。学校の図書館や書店にはあったと思いますが、普通の農家に聖書があるというのは珍しいことなので、大変驚きました。手に取って見ることはしませんでした。何となく気味悪かったのです。聖書を初めて見た時の印象はそんな感じでした。

ずいぶん後になって、家族の誰かから「あの聖書は安恵の遺品の中にあつた」と聞いた記憶があります。私は男4人、女4人の8人兄弟の末っ子です。安恵というのは私の一番上の姉です。姉は38歳の時、子宮癌で亡くなりました。その姉の遺品の中に1冊の聖書があつたのです。久保田家がキリスト教とは何の関係もないと思える時の話です。私が生ま

れ育つた50軒ほどの小さな村に、その頃、聖書のある家など恐らく1軒もなかったと思います。

父と母の出会い

私の家の事情を少し話しますと、私の父は子ども3人を残して最初の奥さんに先立たれます。父が台湾にいた頃、結核で亡くなつたそうです。太平洋戦争前、日本が台湾を統治していた時代のことです。父は大日本製糖という会社で働いていましたが、男手一つで3人の子どもを育てるのは大変です。そこで、勤める人があつて私の母と再婚します。母は母で一度結婚しますが、母一人息子一人の家だつたようで、結局、姑さんと衝突して半年ぐらいで実家に帰つて来ました。

旦那さんは優しい人で母を実家まで迎えに来てくれましたが、母は頑として戻らず、離婚となつたそうです。そして母は勤めに出ます。その職場に父がいました。それで紹介する人がいて再婚しました。ですから私の両親は2人とも再婚です。年齢はちょうど20歳離れています。私の母からも子どもが5人生まれて、その一番下が私です。母から生まれた上2人の姉は台湾生まれです。下3人は戦後、台湾から種子島に引き揚げて来た後で生まれました。私が最後に昭和27年、1952年生まれます。

母と娘のぶつかり合い

母にとっては、父の先妻の子が3人いますが、女の子とは激しくぶつかりました。それが安恵です。この長女は大変気が強く、わがままな子だつたようです。母親を小さい時に亡くしたということ、ふびんに思つて周りがかわいがり、甘やかすものですから、大変気位の高いわがままな性格で育つたようです。一方、母もなかなか気が強い性格です。で、そんな2人がぶつかるものですから、その戦いは大変激しかったそうです。

今、熊谷の老人ホームにいる私の叔母、母の妹が言っています。

「周ちゃん、安恵ちゃんを叱るあなたのお母さんの顔が鬼に見えたよ」

姉もまた、いくら叩かれても言うことを聞かなかつた。戦争が終わつて種子島に引き揚げて来ても、母と姉の戦いは続きました。姉は種子島で一度結婚しますが長くは続かず、長女をお腹に宿した後に離婚し、実家に帰つて来ます。女の子を出産した後、姉は種子島を出て行きました。その女の子はその後、他の家に養女に出されました。戸籍上は私の妹ということになっています。(以下略)